

# 大原幽学伝

改訂版

農村理想社会への実践

鈴木久仁直 著



己れ人を愛すれば、人も亦我れを愛して即ち和す  
『微味幽玄考』より

## はじめに

江戸天明・天保の大飢饉以降、関東の農村は間引き（新生児殺し）が横行するほど荒廃していた。荒れた農村の復興に挑んだ人物が二宮尊徳と大原幽学である。二人は同時代の関東に生き、農村復興の指導者として知られる。

支配階級の武士は貨幣経済にほんろうされ、関東の農村を復興する力などなかった。幽学は二宮尊徳と違い、権力と結びつかず自力での改革を実践する。権力も、お金も、社会的地位もない幽学がどのように指導したのだろう。

幽学の指導した村々は、江戸へ直結する幹線水運路の利根川と、イワシで賑わう銚子から九十九里浜に挟まれた地域である。イワシは最高の肥料干鰯（ほしか）としめ粕の原料で、大量輸送手段は船しかない時代である。物も金も動く、貨幣経済が浸透した地域である。活動の具体的な地は銚子市・東庄町・小見川町・山田町・佐原市・成田市・飯岡町・旭市・八日市場市、住居を構えた千潟町などである。さらに長野県上田市・小諸市などにも広がっている。

とくに天保の飢饉が襲うと、農村の階層分解はいっそう進む。大地主も生まれるが、つぶれる農家も発生する。農地を失い小作人（水呑百姓）に転落する。村で生活できなければ、あてのない放浪の旅に出るか、河岸に流れるかしかない。河岸で低賃金労働がみつからなければ、物ごいや博徒に転落す

るしかない。

銚子五郎藏・飯岡助五郎・笹川繁藏・佐原喜三郎らは転落農民を吸収して勢力をのばす。利根川上流の国定忠治、太前田栄五郎を含め、利根川筋は東海道と並ぶ博徒の二大発生地である。江戸の消費文化が影響する地域である。五郎藏や助五郎らは銚子陣屋から十手取縄を預かる。庶民が嫌う二足のわらじである。暴力と小権力を併せ持つのだから始末が悪い。一方、繁藏や忠治はお上の手先とならずに、花と散った潔さが大衆人気差であろう。

人口が減少し、博徒が横行する荒廃した農村をみかね、大原幽学は歴史の舞台に登場する。幽学は不明な点もあるが、多くの功績が評価されている。独自の仕法、合理的できめ細やかな活動を展開する。耕地整理を含む農業技術の改良、先祖株組合(協同組合)の結成、共同購入、生活改善、子供や女性の教育まで指導実践する。個人、家族、農村集落と多様な取り組みを行う。高潔な人柄と厳しい日常生活で指導する。

幽学は武士に生まれ、放浪の旅に学ぶ。最後は農村で農民に囲まれ、みずからの手で六二歳の人生を閉じた。苦悩を積み重ね、農村復興に命をかけた壮烈な生涯であった。封建制の世、分相応や忠孝をよく口にして武士を理想化する。ただ独創的、合理的、柔軟な指導や行動の中には反体制的な点も含まれる。今なお幽学の教えは現代に生き先生と慕う人が多い。幽学の真骨頂が人間教育、生涯教育、人格形成にあったからだろう。幽学は農村復興の指導者と評価されているが、それ以上に教育者として高く評価したい。

平成の現代、金もうけ主義・金権主義が蔓延する。保険金などのために妻や夫、子供までが殺され

ている。さらに子供が子供を殺りくする事件にはやりきれない。いたたまれないほど人心が荒廃している。大人社会の荒廃は子供たちに悪影響を及ぼす。教育現場は退廃が叫ばれて久しい。道徳・倫理・正義感といった言葉は死語になりつつある。道徳や道義をしつかり守り、教育と人格形成に功績のある幽学を注目すべきだろう。

幽学の生涯は波瀾万丈である。幽学はどん底の不幸や不運に陥っても、夢をつかもうと強く願いつづけた。努力と工夫で夢はかなうことを幽学の生涯が証明する。厳しい封建制の時代、底辺の無宿人の身で、自力で農村復興を成功させ、理想社会をめざした。すばらしき人生である。門人を諭す悲劇的な自害、あまりに潔く身を処した。

幽学の理想と実践から、日本農業の基本的な考え方や復興のアイデアを学ぼう。先人のすぐれた研究に学び、風土や産業、時代背景を織りませ、房総の郷土が復興するようすを考えたい。よそ者の幽学は一人でゼロから始めた。権力やお金がなくても、人々の教育や村々の復興に成功する。幽学の教訓や功績は現代にも通用するだろう。

●目次

はじめに 3

第一章 遊歴から社会教育

突然の勘当 12 幽学の少年時代 15 放浪の生活 18

師との出会い 20 社会教育を決断 24 木曾から信州へ 26

信州上田で開講 27 活動の禁止 29

第二章 幽学のみた房総

江戸から房総へ 32 幽学の時代の房総 35 間引きと闘う子育て善兵衛 36

米はイワシで作る 39 無法天保水滸伝の世界 41 利根川水運の賑わい 44

遊女も地元の農村から 46 関東取締出役の設立 47

### 第三章 性学の実践

房総で遊歴開始	52	千葉県北東部を巡回	54	道友(門人)の獲得	56
厳肅な神文式	58	性学の思想とは	62	教義対象者の変更	64
房総退去宣言	66	西上宣言の意図	68	禁酒を決意	71
幽学活動の地	73	学頭・医師本多元俊	76	長部定住へ	78

### 第四章 農村復興の成功

先祖株組合の結成	82	長部村先祖株組合の発展	84	スポンサー林伊兵衛	86
民主的な会議	89	耕地整理と交換分合	92	住居の分散移転	94
宿内理想村の建設	96	年間農作業計画	98	性学植の実践	101
自給肥料の奨励	103	干鰯の禁止	104	宮負貞雄家の農業経営	106
共同購入消費組合	108	領主の性学表彰	109		

## 第五章 目標は平等社会と人づくり

- 男子性学日 112
- 女子教育の奨励 113
- 結婚について 116
- 妊婦の教え 118
- 換子教育の実践 120
- 子供教育の重視 123
- 子供教育は家庭から 127
- 生活改善運動 129
- 胃に優しい「性学もち」 131
- 人間改革をめざす 134
- 道を求めて 135
- 子孫繁栄の法とは 137
- 平等な社会を模索 139
- 現実的な分相応論 141

## 第六章 改心楼乱入事件と幽学の自殺

- 改心楼の建設 146
- 改心楼乱入事件 148
- 取調べ前哨戦 152
- 関東取締出役の審理 154
- 幽学の身分を認定 157
- 幽学と高松家 160
- 彦七郎弟説の崩壊 162
- 意気高く裁判を開始 164
- だらだら裁判 167
- 裁判の実施を嘆願 169
- 裁判費用にあえぐ 171
- 性学解体と評価の判決 175
- 高松家で謹慎 178
- 長部に帰る 180
- 自殺の決行 182
- 幽学の遺書 185



## 七章 幽学亡き後の八石性理学会

- 二代目教祖遠藤良左衛門 190 教導施設の建設 194 丹精(労働奉仕)の強化 196  
明治政府の弾圧 198 二代目教主良左衛門の死 200 三代目教主石毛源五郎 204  
対立の激化 206 教主石毛の追放 208 財団法人八石性理学会の認可 210  
二宮尊徳と幽学 211 大原幽学記念館の開設 213

## あとがき 217

## 参考文献 221